

現代チベット語における LA 格助詞と  $\phi$  格<sup>\*)、1)</sup>

高橋 慶 治

## はじめに

本稿は、現代チベット語口語ラサ(中央)方言(以下、チベット語と略称する)において、LA 格助詞が現れる場合と現れない場合を比較して、LA 格助詞の用法について考えるものである。

ここで言う LA 格助詞とは、古典文法で言う la don の全てではなく、チベット語に出現する /la/ と、その交替形式である音節末の短母音の長音化という二種のみを指す。現代チベット語口語では、他の la don 形式は、ほとんど現れないため、考慮に入れる必要はない。また、 $\phi$  (ゼロ) 格というのは、後置詞を持たない、名詞だけの形式である<sup>2)</sup>。

本稿では、「格」という用語を、形式の面に基づくものとして用いる。すなわち、「LA 格」とは、「名詞の、LA 格助詞を伴った形」という意味で用いられる。意味の面から「格」という用語を用いる場合には、「主格」「与格」などのように、カギ括弧を付けて区別する。

さて、LA 格助詞については、さまざまに言及されているにも関わらず、その現れ方を統一的に説明できていない。特に、いわゆる目的語を表す場合、一般的には、LA 格名詞が「間接目的語」、 $\phi$  格名詞が「直接目的語」を表すと言われることが多いが、チベット語の助詞体系の中で妥当な解釈と言えるだろうか。たんに、「間接目的語」・「直接目的語」という一般的な用語<sup>3)</sup>で、チベット語の格形式に単純に意味役割を指定したり、また、日本語の「に」や「を」に単純に割り当ててのではなく、チベット語の特性を見出しうる記述が、まず、必要であると考え。そこで、本稿では、特に、LA 格と  $\phi$  格を比較しながら、LA 格助詞がどのような場合に用いられるかを検討する。

以下、本稿の表記は、すべて音韻表記であって、文語形は用いない。

I.  $\phi$  格と LA 格の典型的な用法

特殊と思われる用例を見る前に、本章において、 $\phi$  格

名詞を「直接目的語」、LA 格名詞を「間接目的語」と見なししてしまえるような用例を見ておこう。すなわち、本章に挙げる例文は、普段、よく見られるものであって、直観的には、何の疑問も生じさせない。

本章で扱う単純動詞は、後に見る複合動詞が、「名詞+動詞化詞」という形式であるのに対し、動詞だけで成り立っているものである。(以下の例文中、“\*” は、その文が不適格な文、すなわち、正しくない文であることを表す。また、“?” は、不適格ではないが、不自然な文であるということを表す。

1. 「直接目的語」としての  $\phi$  格名詞

まず、1) から 4) の例を見てみると、それぞれの例の  $\phi$  格名詞を、「直接目的語」と呼ぶことができよう。

1) a. \sonam kää \trashii \säa·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名>- $\phi$  殺す-AUX.V  
 ソナムはタシを殺した

b. \* \sonam kää \trashii la \säa·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名> LA 殺す-AUX.V

2) a. \sonam kää \kushu ci ^säa·pa ^ree  
 <人名> GIS 林檎 - $\phi$  食べる-AUX.V  
 ソナムはりんごを食べた

b. \* \sonam kää \kushu ci la ^säa·pa ^ree  
 <人名> GIS 林檎 - LA 食べる-AUX.V

3) a. \sonam kää \trashii ^kuu·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名>- $\phi$  待つ-AUX.V  
 ソナムはタシを待った

b. \* \sonam kää \trashii la ^kuu·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名> LA 待つ-AUX.V

4) a. \trashii kää \puku \tung·pa ^ree  
 <人名> GIS 子供- $\phi$  殴る-AUX.V  
 タシは子供を殴った

b. \* \trashii kää \puku la \tung·pa ^ree  
 <人名> GIS 子供 LA 殴る-AUX.V

1) について見てみると、殺される「タシ」が、生から死という変化を被る主体となっている。この時、「直接目

的語」である「タシ」は $\phi$ 格となり、LA 格助詞が付加されると不適格な文となる。2)の「食べる」、3)の「待つ」、4)の「殴る」も同様に、動作を受ける対象である被動者が LA 格助詞を取ると不適格な文になる。

## 2. 「間接目的語」を表示する LA 格助詞

次の5)から10)の例では、動詞が取っている二つの名詞の内、LA 格助詞が、形式的に「間接目的語」となっていると見えそうに見える。

5) a. \sonam kää \trashii la \kushu ci  
 <人名> GIS <人名> LA 林檎 一  
 \trää·pa ^ree  
 与える-AUX.V

ソナムはタシにりんごを与えた

b. \* \sonam kää \trashii \kushu ci  
 <人名> GIS <人名>- $\phi$  林檎 一  
 \trää·pa ^ree  
 与える-AUX.V

6) a. \sonam kää \puku la 'yiki ci \tan·pa ^ree  
 <人名> GIS 子供 LA 手紙 一 送る-AUX.V  
 ソナムは子供に手紙を送った

b. \* \sonam kää \puku 'yiki ci \tan·pa ^ree  
 <人名> GIS 子供- $\phi$  手紙 一 送る-AUX.V

7) a. \sonam kää \lama la 'oma \phüü·pa ^ree  
 <人名> GIS ラマ LA ミルク 与える-AUX.V  
 ソナムはラマにミルクを差し上げた

b. \* \sonam kää \lama 'oma \phüü·pa ^ree  
 <人名> GIS ラマ- $\phi$  ミルク 与える-AUX.V

8) a. \sonam kää \trashii la \ngüü \yaa·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名> LA お金 貸す-AUX.V  
 ソナムはタシにお金を貸した

b. \* \sonam kää \trashii \ngüü \yaa·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名>- $\phi$  お金 貸す-AUX.V

ここで、LA 格助詞を取って現れている名詞が、各例文のbのように、 $\phi$ 格で現れると、不適格な文になる。この時、 $\phi$ 格名詞は移動の主体であり、LA 格名詞がその到達点を表していると言うこともできる。5)では、「林檎」が移動者であり、「タシ」はその到達点となっている。6)では、 $\phi$ 格である「手紙」が移動者、「子供」がその到達点である。7)や8)でも、 $\phi$ 格の「ミルク」、「お金」が移動者であり、LA 格の「ラマ」、「タシ」が移動の到達点となる。

9)、10)の例は、受益者、すなわち、物理的な移動の到達点というよりも、利益を受けるものを LA 格名詞で表している。

9) a. \sonam kää \trashii la \kushu ci  
 <人名> GIS <人名> LA 林檎 一  
 ^nyöö·pa ^ree  
 買う-AUX.V

ソナムはタシにりんごを買ってやった

b. \* \sonam kää \trashii \kushu ci  
 <人名> GIS <人名>- $\phi$  林檎 一  
 ^nyöö·pa ^ree  
 買う-AUX.V

10) a. \sonam kää \puku la \trum ci \loo·pa ^ree  
 <人名> GIS 子供 LA 物語 一 読む-AUX.V  
 ソナムは子供に物語を読んでやった

b. \* \sonam kää \puku \trum ci \loo·pa ^ree  
 <人名> GIS 子供- $\phi$  物語 一 読む-AUX.V

「買う」や「読む」という行為は、本来、行為者自身が受け手であるが、ここでは、LA 格名詞を取ることによって、その行為が、他の人のために行われたことを、または、他の人に向かって行われたことを表す。9)では、「買った林檎」はタシへと移動し、10)では、子供に向かって本が読まれたことになるのである。

第I章の例は、LA 格と $\phi$ 格が、その基本的な意味で用いられている例である。これらの例だけから見ると、 $\phi$ 格名詞が「直接目的語」、LA 格名詞が「間接目的語」であるという従来の考え方に合致するものである。しかし、「目的語」という統語的用語を用いず、上にも述べたように、 $\phi$ 格名詞を移動者・変化者、LA 格名詞をその到達点とする見方も可能である。

次章では、「直接目的語」を LA 格で表すものを見る。これは、従来の説明には、適合しない現象である。

## II. 「直接目的語」を表す LA 格助詞

### 1. LA 格名詞しか取らない動詞

11)から13)の例では、動作を受ける対象を表す名詞(被動者)が LA 格となっている。上で見たように、被動者は $\phi$ 格になることが期待されるが、ここではそうはならない。11)では、「彼」の行為が、「彼女」に向かうのであるが、彼女の側からの働き掛けはない。bのように「彼女」を $\phi$ 格にすると、不適格な文となる。

11) a. \khöö \mo la \tham·pa ^ree  
 彼-GIS 彼女 LA 抱く-AUX.V

彼は彼女を抱きしめた

b. \* \khöö \mo \tham·pa ^ree  
 彼-GIS 彼女- $\phi$  抱く-AUX.V

この場合、「彼女」が LA 格になっているということは、「抱く」という行為が「彼」からの一方的な行為で

あることを表す。

次の12)では、「tsikpa」が LA 格となっている。

12) a. \sonam kää \tsikpaa ^shüü·pa ^ree  
 <人名> GIS 壁-LA 叩く-AUX.V  
 ソナムは壁を叩いた

b. \* \sonam kää \tsikpa ^shüü·pa ^ree  
 <人名> GIS 壁-φ 叩く-AUX.V

これは、「叩く」という行為が、「壁」に向かっていることを表す。bのように、「tsikpa」を φ 格にした場合、「壁」は他の物に対してぶつけられるものとなって、「壁」が叩かれる対象であるという a のような解釈には不適格な文となる。

13)では、「ソナム」が「タシ」に対して一方的に競争心を持っていて、それを態度に表すということであり、「タシ」自身は「ソナム」の行為に対抗しないし、「ソナム」が競争心を持っていることを知らなくてもよい。

13) a. \sonam kää \trashii la 'trän·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名> LA 争う-AUX.V  
 ソナムはタシと争った

b. \* \sonam kää \trashii 'trän·pa ^ree  
 <人名> GIS <人名>-φ 争う-AUX.V

すなわち、「trän」という動詞が、LA 格名詞を取る場合、この名詞が表す実体は動詞の表す動作には、直接関わっていないということである。

11)や13)で、相互的な行為を表したい場合には、DANG 格助詞を用いる。この場合、動詞も相互を表す形式を取ることが好まれる。(註9参照)

## 2. LA 格名詞と φ 格名詞の両方を取る動詞

本節では、動作を受ける対象である被動者が、同じ動詞に対して、LA 格を名詞となったり、φ 格名詞となったりする例を見よう。ここで注意しなければならないことは、これらが、格形式の単純な交替ではなく、意味の相違を伴っている点である。

例文14)では、生物である「人」が LA 格となり、15)では、無生物である「水」が φ 格となっている。この格形の違いは、名詞の有生・無生に関わっているのだろうか。

14) a. \kyhii 'mi la ^taa su  
 犬-GIS 人 LA なめる AUX.V  
 犬が人をなめた

b. \* \kyhii 'mi ^taa su  
 犬-GIS 人-φ なめる AUX.V

15) a. ^shimii \chu la ^taa su  
 猫-GIS 水-φ なめる AUX.V  
 猫が水をなめた

b. \* ^shimii \chu la ^taa su  
 猫-GIS 水 LA なめる AUX.V

次の例を見ると、無生物である「果物」が、φ 格でも LA 格でも適格な文である。この例から、動詞 ^taa の被動者を φ 格とするか LA 格とするかは、名詞の有生・無生の別に関わっていないことがわかる。

16) a. \trashii kää \shingtoo ^taa su  
 <人名> GIS 果物-φ なめる AUX.V  
 タシは果物をなめた

b. \trashii kää \shingtoo la ^taa su  
 <人名> GIS 果物 LA なめる AUX.V  
 タシは果物をなめた

16)において、φ 格で表された a では、なめた果物が最終的に食べられたことを意味している。それに対し、LA 格で表された b では、ただ単になめただけであることを表す。これを、14)、15)の例に当てはめて考えてみると、14)では、「犬」にとって「人」はなめて食べられるものではないから、なめるだけとなり、LA 格名詞で表され、15)では、「水」は、なめれば必ず腹に入るので、φ 格で表される。

次の動詞は、「täa」[見る]である。この場合も、LA 格名詞と φ 格名詞の両方を取ることができる。

17) a. \khöö \kyhi la 'täa·pa ^ree  
 彼-GIS 犬 LA 見る-AUX.V  
 彼は犬を見た

b. \khöö \kyhi 'täa·pa ^ree  
 彼-GIS 犬-φ 見る-AUX.V  
 彼は犬(の良し悪し)を見た

18) a. \khöö ^thep la 'täa·pa ^ree  
 彼-GIS 本 LA 見る-AUX.V  
 彼は本を見た

b. \khöö ^thep 'täa·pa ^ree  
 彼-GIS 本-φ 見る-AUX.V  
 彼は本を読んだ

ここでの意味の違いは、a のように LA 格名詞を取る場合は、それを対象として、視線をその方向に向け、「見つめる」ということであり、b のように φ 格名詞を取る場合は、「見る」という行為は漠然としたものになり、「判断する」「読む(黙読する)」などのような意味である。ここに「見つめる」という意味はない。

次のように「ドラマ」「ショー」「映画」などを見る場合には、φ 格名詞が用いられ、LA 格名詞にすると不適格である。

19) a. ^ngää 'töökaa 'täa·pa 'yin  
 私-GIS ドラマ-φ 見る-AUX.V

私はドラマを見た

- b. \*<sup>^</sup>ngää /töökaa la \tää·pa /yin  
私-GIS ドラマ LA 見る-AUX. V

- 20) a. <sup>^</sup>ngää /täämo \tää·pa /yin  
私-GIS ショー-φ 見る-AUX. V  
私はショーを見た

- b. \*<sup>^</sup>ngää /täämo la \tää·pa /yin  
私-GIS ショー LA 見る-AUX. V

- 21) a. <sup>^</sup>ngää /pesikop \tää·pa /yin  
私-GIS 映画-φ 見る-AUX. V  
私は映画を見た

- b. \*<sup>^</sup>ngää /pesikop la \tää·pa /yin  
私-GIS 映画 LA 見る-AUX. V

上記の例と併せて考えると、ある種の動きや内容の全体を見る場合には、φ 格名詞が用いられている。LA 格名詞を取る場合、\tää は「一点を集中して見る」という意味になり、「ドラマ」や「映画」などは、「見つめる」という行為には馴染みにくいので、LA 格名詞を取らないのだと考えられる<sup>4)</sup>。

動詞 <sup>^</sup>sii は、\tää「見る」と <sup>^</sup>nyöö「買う」の両方の共通の敬語形である。22)のように LA 格名詞を被動者として取ると「見る」の意味になり、23)のように φ 格名詞を取る時には「買う」の意味になる。これらは、それぞれの動詞の非敬語形の用法をそのまま受け継いでいるからだと考えることができる。

- 22) \sonam·laa kää <sup>^</sup>thep la <sup>^</sup>sii·pa <sup>^</sup>ree  
<人名>(h) GIS 本 LA 見る(h)-AUX. V  
ソナムさんは本をご覧になった(h)

- 23) a. \sonam·laa kää <sup>^</sup>thep <sup>^</sup>sii·pa <sup>^</sup>ree  
<人名>(h) GIS 本-φ 買う(h)-AUX. V  
ソナムさんは本をお買いになった(h)

- b. \sonam kää <sup>^</sup>thep φ/\*la <sup>^</sup>nyöö·pa <sup>^</sup>ree  
<人名> GIS 本 φ/LA 買う-AUX. V  
ソナムは本を買った(nh)

ただし、\tää に、LA 格名詞を取る用法と φ 格名詞を取る用法の両方があるように、<sup>^</sup>sii にも、両方の場合がある。従って、23a) は、「読む」の意味での \tää の敬語形であるとも考えることもできる。この点は、分脈によって判断せざるをえない。しかし、いずれにしても、22) の場合には、\tää の敬語形でしかありえない。

なお、<sup>^</sup>nyän「聴く」も並行的な区別ができる。

- 24) a. \trashii kää /kän·laa ki \kamöö  
<人名> GIS 先生 GI 話(h)-φ  
<sup>^</sup>nyän·pa <sup>^</sup>ree  
聴く-AUX. V

タシは先生のお話を聴いた

- b. \*<sup>^</sup>trashii kää /kän·laa ki \kamöö la  
<人名> GIS 先生 GI 話(h) LA  
<sup>^</sup>nyän·pa <sup>^</sup>ree  
聴く-AUX. V

- 25) a. \trashii kää /kän·laa ki /shää la  
<人名> GIS 先生 GI 口(h) LA  
<sup>^</sup>nyän·pa <sup>^</sup>ree  
聴く-AUX. V

タシは先生の言うことを聞いた

- b. \*<sup>^</sup>trashii kää /kän·laa ki /shää  
<人名> GIS 先生 GI 口(h)-φ  
<sup>^</sup>nyän·pa <sup>^</sup>ree  
聴く-AUX. V

24)は、「話」の全体・内容に耳を傾けるのである。話全体の内容に関することであり、\tää「見る」の「映画」などに対するのと同様、φ 格名詞が用いられる。25)は、元の意味は「口に從う」ということであり、LA 格助詞によって、注目する対象を表す。

### III. 複合動詞における LA 格助詞の現れについて

現代チベット語においては、複合動詞が多く用いられるようになってきている。複合動詞は、「名詞+動詞化詞」という構造を持つ。この名詞部分は、名詞や動詞から成る複合名詞である。ここで扱う複合動詞の動詞化詞は、<sup>^</sup>kyap, <sup>^</sup>chää, \tan である<sup>5)</sup>。

複合動詞は、多くの場合、その内部の名詞が φ 格名詞であるので、さらに一つの名詞を目的語に取るとき、φ 格名詞が二つ重なることを嫌って、二つの名詞の内一方が統語的に LA 格助詞をとる可能性があると考えることができよう。しかし、第2節で見ると、実際には、φ 格名詞が重なることがあるので、統語的な説明は適切ではない。

#### 1. LA 格名詞を取る複合動詞

複合動詞で LA 格助詞を取るものは、形式的には「間接目的語」とであると言えるが、意味的には、その LA 格助詞は動詞が表す動作の到達点となっている。

26)では、「反対」という行為の目標として、「条約」が LA 格名詞になる。

- 26) a. \khontsöö /ching'yii /thee  
彼-PL-GIS 条約 それ-LA  
<sup>^</sup>ngoköö <sup>^</sup>chää·pa <sup>^</sup>ree  
反対 VBL-AUX. V  
彼らはその条約に反対した

- b. \*'khontsöö 'ching'yii 'the  
 彼-PL-GIS 条約 それ-φ  
'ngoköö 'chää·pa 'ree  
 反対 VBL-AUX.V

27)では、「手助け」が「彼」に到ることを表すために、LA 格が用いられる。

- 27) a. 'ngää 'khoo 'roo 'chää·pa 'yin  
 私-GIS 彼-LA 助け VBL-AUX.V  
 私は彼を助けた

- b. \*'ngää 'kho 'roo 'chää·pa 'yin  
 私-GIS 彼-φ 助け VBL-AUX.V

28)では、「叱りつける」という行為が「学生」に及ぶことを表す。

- 28) a. 'khöö 'loptraa·tsoo 'sheshe 'tan su  
 彼-GIS 学生-PL-LA 叱咤 VBL AUX.V  
 彼は学生たちを叱った

- b. \*'khöö 'loptraa·tso 'sheshe 'tan su  
 彼-GIS 学生-PL-φ 叱咤 VBL AUX.V

29)は、「命令」が「彼」を到達点としている。

- 29) a. 'shung kää 'khoo 'kyuus  
 政府 GIS 彼-LA 走る-QT  
'ka 'tan shaa  
 命令 VBL AUX.V

政府は彼に行けと命令した

- b. \*'shung kää 'kho 'kyuus  
 政府 GIS 彼-φ 走る-QT  
'ka 'tan shaa  
 命令 VBL AUX.V

以上の例では、行為者の動作によってある種の実質的な影響が、LA 格名詞で表されているものを到達点として、与えられたとすることができる。

次の例は興味深い。'öö 'tön は、複合動詞としては、「みがく」という意味であり、LA 格名詞を取る。これは、「みがく」という行為が「ナイフ」に何かを付加しているということを示唆しているという<sup>9)</sup>。そこで、bのようにφ格名詞にすると適格さが下がる。(不適格であると言われることもある。)

- 30) a. 'ngää 'trhi la 'öö 'tönki 'yin  
 私-GIS ナイフ LA 光 出す-AUX.V  
 私はナイフをみがく

- b. ?'ngää 'trhi 'öö 'tönki 'yin  
 私-GIS ナイフ-φ 光 出す-AUX.V

これに対して、30c)のように、LA 格助詞の代わりにNAS 格助詞を用いると、'öö 'tön は「光を出す」という、構成要素そのものの意味となる。

- 30) c. 'ngää 'trhi nää 'öö 'tönki 'yin  
 私-GIS ナイフ NAS 光 出す-AUX.V  
 私は(光を反射させて)ナイフから光を出す

30)の例によって、複合動詞が、単なる「名詞+動詞」という語連続ではなく、意味的な統合体であることがわかる。

31)のように、複合動詞の名詞部分の外に、さらに、名詞が三個存在する場合、やはり、受け手を表す名詞がLA 格となる。

- 31) a. 'khöö 'kyopo·tsoo 'yikcää  
 彼-GIS 貧しい-PL-LA 文具-φ  
'trempee 'chää·pa 'ree  
 分配-φ VBL-AUX.V

彼は貧しい人たちに文具を分配した

- b. \*'khöö 'kyopo·tso 'yikcää la  
 彼-GIS 貧しい-PL-φ 文具 LA  
'trempee 'chää·pa 'ree  
 分配-φ VBL-AUX.V

以上のことを併せて考えると、複合動詞が取る項の一つがLA 格名詞である場合、統語的にLA 格助詞を取って出現しているのではなく、意味的に到達点を表す名詞句にLA 格助詞が付加されたと言える。

## 2. φ 格名詞を取る複合動詞

前述のように、φ 格名詞を内部に持つ複合動詞が、さらに一つの名詞句を取る時、これを必ずLA 格名詞にするのであれば、LA 格助詞の出現を、統語的なものとして説明できよう。しかし、ここで見るように、被動者そのものが、変化したり出現したりするような動作などを表す動詞の場合、この被動者はφ 格となる。

32)は、まとまった「お金」の分割という変化である。

- 32) a. 'khontsöö 'ngüü 'kosha 'kya·pa 'ree  
 彼-PL-GIS お金-φ 分割 VBL-AUX.V  
 彼らはお金を分けた

- b. \*'khontsöö 'ngüü la 'kosha 'kya·pa 'ree  
 彼-PL-GIS お金 LA 分割 VBL-AUX.V

33)では、「大麦」が「生産」によって出現することを表す。すなわち、無から有への変化と言える。

- 33) a. 'sonampa kää 'nää  
 農民 GIS 大麦-φ  
'thönkyee 'cheki 'yoo 'ree  
 生産 VBL-AUX.V  
 農民は大麦を作っている

- b. \*sonampa kää ^näa la  
 農民 GIS 大麦 LA  
'thönkyee 'cheki 'yoo ^ree  
 生産 VBL-AUX. V

逆に、有から無への変化としては、次のようなものがある。紙が、燃焼によって無くなってしまふ。

- 34) a. ^ngää shuku ^metraa tan·pa 'yin  
 私-GIS 紙-φ 燃焼 VBL-AUX. V  
 私は紙を燃やした
- b. \*^ngää shuku la ^metraa tan·pa 'yin  
 私-GIS 紙 LA 燃焼 VBL-AUX. V

35)では、「店」が商売をしている状態からしていない状態へと変化する。

- 35) a. 'sonam kää tshongkan 'chotsö  
 <人名> GIS 店-φ 時間  
'trhukpaa 'ko ^kyakii  
 第6-LA 戸 VBL-AUX. V  
 ソナムは店を六時に閉める
- b. \*'sonam kää tshongkan la 'chotsö  
 <人名> GIS 店 LA 時間  
'trhukpaa 'ko ^kyakii  
 第6-LA 戸 VBL-AUX. V

本節の最初に述べたように、複合動詞の被動者が、単に、動作による影響を受けるだけでなく、ある種の変化を伴う場合、この被動者は φ 格名詞となる。この被動者は、行為者の動作を受けると同時に、変化の主体となっている。

### 3. φ 格名詞と LA 格名詞の両方を取る複合動詞

次の36)と37)は、上の14)から16)で見たのと同様、なめた対象が腹の中に入るかどうかを基準にして、φ 格と LA 格が使い分けられる。すなわち、「私」は、「犬」にとってなめて呑込める対象ではないから、LA 格助詞を取る。「ミルク」は、なめれば必ず腹に入るの、φ 格となる。

- 36) a. 'kyhii 'ngaa 'centaa ^kyap cu  
 犬-GIS 私-LA 舌嘗め VBL AUX. V  
 犬が私をなめた
- b. \*'kyhii 'nga 'centaa ^kyap cu  
 犬-GIS 私-φ 舌嘗め VBL AUX. V
- 37) a. ^shimii 'oma 'centaa ^kyap su  
 猫-GIS ミルク-φ 舌嘗め VBL AUX. V  
 猫がミルクをなめた
- b. \*^shimii 'omaa 'centaa ^kyap su  
 猫-GIS ミルク-LA 舌嘗め VBL AUX. V

ただし、複合動詞の名詞部分 'centaa は、元々、'ce 「舌」という形態素を含むため、単になめるだけの動作を表すことが多い。

次の動詞 'kää tan は、「呼び寄せる」という意味である。tan は、本来の意味は「送る」であり、この複合動詞は、逐語的には「声を送る」となるが、実際には、声をかけられた対象が、行為者の方へ移動することが期待されている。

38a)では、声をかけられた「私」が「母」の方へ移動する。bのように「私」を LA 格にすると、声をかけた対象が他の人ではなく、「私」であることを明確にすることになる。

- 38) a. 'ama·laa kää 'nga 'kää tan cu  
 母 GIS 私-φ 声 VBL AUX. V  
 母は私を呼んだ
- b. 'ama·laa kää 'ngaa 'kää tan cu  
 母 GIS 私-LA 声 VBL AUX. V  
 (同上)

39a)では、「タシ」の移動先が「パーティ」であることが明示されている。aとbの違いは38)の場合と同じである。すなわち、bでは、「タシ」が LA 格になることによって、他の人ではなく「タシ」を呼んだということを表している<sup>8)</sup>。

- 39) a. 'sonam kää 'trashii thutro la  
 <人名> GIS <人名>-φ パーティ LA  
'kää tan·pa ^ree  
 声 VBL-AUX. V  
 ソナムはタシをパーティに呼んだ
- b. 'sonam kää 'trashii la thutro la  
 <人名> GIS <人名> LA パーティ LA  
'kää tan·pa ^ree  
 声 VBL-AUX. V  
 (同上)

38), 39)は、φ 格名詞を取る a)の方が標準的な構文であり、しかも、φ 格名詞で表された実体は、移動することが期待されている。

第1節で指摘したように、複合動詞は意味的統合体を成して、名詞と動詞の単なる語連続ではない。また、第2節で見たように、φ 格名詞が二つ重なることが許されることから、LA 格助詞は統語的な理由から付加されているのではないことがわかる。むしろ、意味的に、移動や変化の到達点を表すものに LA 格助詞が付加される。

以上のことから、単純動詞・複合動詞を通じて、チベ

ット語における  $\phi$  格が移動者・変化者を表し、LA 格が移動や変化の到達点となることがわかる。

#### IV. 他の格との比較

LA 格助詞の正確な意味を知るためには、他の格助詞との比較も必要である。本章では、被動者または行為の位置を表していると思われる NAS 格と共格としての DANG 格を、LA 格と比較する。

##### 1. NAS 格との相違

40)から42)の例は、被動者として NAS 格名詞を取る動詞の例である。

NAS 格を用いる場合、NAS 格名詞が表す実体を起点として他の実体をつかんだり、引っ張ったりしていると意識される。例えば、40a)では、「つかんだロープが、他のものにつながっている」ことを表し、41a)では、「足を引っ張って、それが身体全体に及ぶ」ことを示す。

- 40) a. \`losan kää ṭhakpa nää <sup>^</sup>cüü·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS ロープ NAS 掴む-AUX.V  
 ロサンはロープをつかんだ
- b. \`losan kää ṭhakpa <sup>^</sup>cüü·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS ロープ- $\phi$  掴む-AUX.V  
 ロサンはロープをつかんだ
- c. \`losan kää ṭhakpaa <sup>^</sup>cüü·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS ロープ-LA 掴む-AUX.V  
 ロサンはロープをつかんだ
- 41) a. \`trashii kää ṭkangpa nää <sup>^</sup>then·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS 足 NAS 引く-AUX.V  
 タシは足を引っ張った
- b. \`trashii kää ṭkangpa <sup>^</sup>then·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS 足- $\phi$  引く-AUX.V  
 タシは足を引っ張った
- c. \*`trashii kää ṭkangpaa <sup>^</sup>then·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS 足-LA 引く-AUX.V

40c)では、LA 格名詞が現れている。この場合、他の LA 格名詞と同様、「ロープ」が行為の到達点となっている。41c)の場合には、LA 格にはなっていない。これは、「引く」という行為から、到達点を表す LA 格助詞が取られにくいのだと考えられる。

次の二例の違いは、42a)は「自動車」の一部を引っ張って、全体を動かしたということであるが、動いても動かなくてもよく、「引く」という行為に重点が置かれている。一方、b)は、「自動車」を「(遠くまで)引っ張って動かした」という意味であり、距離的に一定以上動

き、動詞としては「動かす」方に重点が置かれている。

- 42) a. \`trashii kää 'motra nää <sup>^</sup>then·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS 自動車 NAS 引く-AUX.V  
 タシは自動車を引っ張った
- b. \`trashii kää 'motra  $\phi$ /\*la/\*nää  
 <人名> GIS 自動車  $\phi$ /LA/NAS  
<sup>^</sup>trhää·pa <sup>^</sup>ree  
 引く-AUX.V  
 タシは自動車を引っ張って行った

これらの例からわかることは、被動者が移動する場合、絶対格が用いられるのに対し、被動者の一部を起点として、全体に影響するような行為は、NAS 格名詞を被動者として取るということである。

NAS 格は、いわゆる「奪格」であり、起点を表す。NAS 格に対し、LA 格は位置や方向は表すことができるが、起点を表すことはない。次の二例は、行為の場所を表していると言えるものだが、LA 格名詞ではなく、NAS 格名詞が用いられている。

- 43) a. \`trashii kää ṭchu nää <sup>^</sup>nya <sup>^</sup>sim·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS 水 NAS 魚 捕る-AUX.V  
 タシは川で魚を捕った
- b. \*`trashii kää ṭchu la <sup>^</sup>nya <sup>^</sup>sim·pa <sup>^</sup>ree  
 <人名> GIS 水 LA 魚 捕る-AUX.V
- 44) a. \`khöö ṭshamtso nää <sup>^</sup>tsha <sup>^</sup>len·pa <sup>^</sup>ree  
 彼-GIS 塩湖 NAS 塩 採る-AUX.V  
 彼は塩湖で塩を取った
- b. \*`khöö ṭshamtso la <sup>^</sup>tsha <sup>^</sup>len·pa <sup>^</sup>ree  
 彼-GIS 塩湖 LA 塩 採る-AUX.V

上の文では、NAS 格助詞の代わりに LA 格助詞を用いると不適切な文になる。「魚」や「塩」は、「川」「塩湖」を起点として、行為者の方へ移動するのだと解釈できる。

##### 2. DANG 格との相違

DANG 格は、相互的な動作においては共同行為者を表す。それに対し、LA 格は、動作が一方的に LA 格名詞が表す実体へと向かうことを表す。

- 45) a. \`khöö 'mo la <sup>^</sup>tham·pa <sup>^</sup>ree  
 彼-GIS 彼女 LA 抱く-AUX.V  
 彼は彼女を抱きしめた
- b. \`khöö 'mo taa <sup>^</sup>tham·pa <sup>^</sup>ree  
 彼-GIS 彼女 DANG 抱く-AUX.V  
 彼は彼女と抱き合った<sup>9)</sup>
- 46) a. \`kyakaa kää 'kyanaa la <sup>^</sup>maa <sup>^</sup>kya·pa <sup>^</sup>ree  
 インド GIS 中国 LA 戦争 VBL-AUX.V  
 インドは中国に戦争を仕掛けた

- b. 'kyakaa kää ^kyanaa taa  
 インド GIS 中国 DANG  
 \maa 'kya·pa ^ree  
 戦争 VBL-AUX.V

インドは中国と戦争をした

45 a)については、LA 格名詞を取る動詞として、上でも見た。bのように DANG 格助詞を用いると、二人が抱き合うことを表す。46 a)では、「インド」が「中国」に戦争を一方的に仕掛けたのである。ところが、bのように DANG 格助詞を用いると、両方が戦いあったということである。相互行為を表すことのできる動詞でも、LA 格名詞を取った場合には、一方的な行為しか表さない。

本章では、LA 格助詞は、常に、移動の到達点を表すために用いられ、NAS 格助詞、DANG 格助詞も、それぞれの固有の意味において用いられることを見た。構文的には、それぞれの助詞を交換できることがあるかもしれないが、意味的には、それぞれが異なった事態を表している。

#### ま と め

本稿において、筆者は、チベット語の LA 格助詞が、いわゆる目的語に付加されている場合も、基本的には移動の到達点を表していることを示した。さらに、他の格についても、LA 格詞との比較によって、LA 格助詞とは異なった独自の意味機能を持ち、その意味を明確に保持して用いられていることがわかった。

本稿においては、GI 格助詞や LAS 格助詞は扱っていない。特に、GI 格助詞は、複合動詞の被動者の位置に現れることがあるので重要である。また、動詞についても、直観的に見るのみで、詳しい記述をしてない。今後、さらに研究が必要である。

#### 註

- \*) 本稿は、'88年11月の日本西藏学会第36回大会（於成田山）において、筆者が発表した「現代チベット語における LA 格助詞と絶対格」の内容を中心にまとめたものである。本稿の例文は、主として、Sonam Chunpee 氏より得られたものである。Sonam 氏には、'88年8月に調査を行った。また、'89年3月に来日した Ngawangthondup 氏に対する調査も参考にした。両氏の間には、適格さの認定にややずれがあるが、それぞれにおいては、本稿に示した原則に従っている。なお、Tshultrim Kalsang 氏からも、

貴重なご意見を頂いた。ここに記して、三氏に対する感謝の意としたい。

- 1) ここで、「 $\phi$  格」と呼ぶのは、本文で説明しているように後置詞を持たない名詞だけの形式であるが、「絶対格」と呼ばれることもある。
- 2) 格助詞の形式と意味について、格助詞の発音、例文での逐語訳、概略の意味は、次の通りである。

| 発音  | 逐語訳  | 意味       |
|-----|------|----------|
| la  | LA   | ～へ、に     |
| kää | GIS  | ～によって、～が |
| nää | NAS  | ～から      |
| lää | LAS  | ～より      |
| ki  | GI   | ～の       |
| taa | DANG | ～と       |

(絶対格)  $\phi$  (または無記) ～を、～が

助詞は、全て、軽声で発音される。LA 格助詞、GIS 格助詞、GI 格助詞については、短母音開音節の名詞に付加する時、屈折形式のごとく名詞の語末母音を変化させることがある。

CV+LA → CVV (特に, i, u → ää, oo)

CV+GI → CVV (特に, a, u, o → ää, üü, öö)

CV+GIS → CVV (特に, a, u, o → ää, üü, öö.

かつ、下降調にする)

この規則は、絶対的なものではない。従って、条件が揃っていても、この屈折的变化を起こさないことがある。短母音閉音節の語は、長母音開音節のものと同じ扱いを受け、この規則は適用されない。本表記法では、原則として、長母音閉音節の語は無い。

- 3) 「目的語」というのは、統語上の用語であり、これに対置される概念は「主語」である。本稿の基本的な目標は、チベット語の文においては、このような統語的な概念は有用ではないことを示すことであると言ってもよい。また、「主格」「与格」などの述語は、誤解を招きやすいので、本稿では用いない。
- 4) ただし、例えば、「私は（他の映画ではなく）この映画を見た」などのように他との比較において、見た映画を取り上げる場合には LA 格名詞が許される。この場合には、映画の内容を見るというのではなく、いくつかの映画の内の一つを選んだことを表していると言える。
- 5) これらの動詞化詞は、主として、意志動詞を形成するが、無意志動詞を形成することもある。本文では、意志動詞の例のみを挙げている。また、動詞化詞には、外にも、\chin, \thep, \shoo など、主として無意志動詞を形成するものもある。

- 6) Ngawangthondup 氏によれば, LA 格名詞を用いると,何かを付加する印象を与えるとのことである。
- 7) Ngawang 氏は, この複合動詞に「食べる」という意味をもたせなかった。また, 上で見た  $\hat{t}aa$  について, 氏は, 液状のものについてのみ言うのであって, 固形のもは, 嘗めて食べることはできないから,  $\backslash centaa \hat{a} kyap$  を使うべきだとされた。また, 液状のものでも, なめるだけ (または, 舌で触れるだけ) のことは可能であるから, 本文の例文 37b) も適格であるという。いずれにしても, LA 格と  $\phi$  格の使い分けは異なっていない。
- 8) 次は, 39) の敬語形と言える。「彼」が, 移動者であり,  $\phi$  格となっている。

$\backslash sonam \ k\ddot{a}\ddot{a} \ \_khon \ \backslash s\ddot{o}tsii \ la$   
 〈人名〉 GIS 彼(h)- $\phi$  食事(h) LA

$\backslash t\ddot{a}ntren \ \hat{a}sh\ddot{u}\ddot{u}\cdot pa \ \hat{a}ree$   
 招待(h) 言う(h)-AUX.V

ソナムは彼を食事に招待した

この場合, Ngawangthondup 氏によると, 「彼」は LA 格にならない。 $\backslash k\ddot{a}\ddot{a} \ \_tan$  と違い, 「招待する」場合, 直接, 声をかけるということがないからのようである。

- 9) この意味では, 次のように言う方が好ましいと言う人もいる。

$\backslash kh\ddot{o}\ddot{o} \ \backslash mo \ taa \ \backslash thamrii \ \hat{a}ch\ddot{a}\ddot{a}\cdot pa \ \hat{a}ree$   
 彼-GIS 彼女 DANG 抱く-〈相互〉 VBL-AUX.V  
 彼は彼女と抱き合った

すなわち, 動詞を相互形にする接辞を付加して名詞化したのち, 動詞化詞によって, 動詞とする。

#### 略号

本稿で用いた略号は次の通りである。

|       |      |     |      |
|-------|------|-----|------|
| AUX.V | 助動詞  | PL  | 複数形  |
| CONJ  | 接続詞  | QT  | 引用標識 |
| (h)   | 敬語形  | VBL | 動詞化詞 |
| (nh)  | 非敬語形 |     |      |

#### 参考文献

- 車謙・胡書津 (1982). 「蔵語的賓語和結構助詞 la sgra」『民族語文研究文集』: 130-49. 西寧, 青海民族出版社.
- DeLancy, Scott Cameron (1980). "Deictic categories in Tibeto-Burman verb". Ph. D. dissertation. Indiana University.
- 格桑居冕 (1982). 「蔵語動詞的使動範疇」『民族語文』 1982. 5: 27-39.
- 星実千代編 (1988). 『現代チベット語文法(仮題)』(東洋文庫でのチベット語講習会の授業用テキスト).
- 胡書津 (1986). 「書面蔵語 "la sgra" 格助詞語法意義芻議」『中国民族語言論文集』 201-25. 成都, 四川民族出版社.
- 長野泰彦 (1986). 「チベット・ビルマ系諸語における能格現象をめぐって」『言語研究』 90: 119-48.
- (1987). 「現代チベット語の文法的特徴」: 長野・立川編 (1987): 204-47.
- 長野泰彦・立川武蔵編 (1987). 『北村甫教授退官記念論文集: チベットの言語と文化』東京, 冬樹社.
- 西田龍雄 (1957). 「チベット語動詞構造の研究」『言語研究』 33: 21-55.
- 武内紹人 (1978). 「現代チベット語における文の構造」修士論文. 京都, 京都大学.
- 謝広華 (1982). 「蔵語動詞語法範疇」『民族語文』 1982. 4: 35-47.